

國學院大學文學部考古学実習報告 第17集

# 小馬背遺跡1989

長野県木曾郡開田村

國學院大學文學部考古学研究室

國學院大學文學部考古学実習報告 第17集

# 小馬背遺跡1989

長野県木曾郡開田村

1989

國學院大學文學部考古学研究室

## 序

考古学は、人間が作ったモノ、人間が働きかけた自然のモノあるいはそれらのモノに関わる情報を通して歴史を解明する学問である。文献や伝承を分析の対象とする文献史学や民俗学との異いがそこにあり、考古学的な独特なアプローチが必要とされる。

発掘は考古学の出発点であり、土中に埋藏された、さまざまなモノ、情報を抽出する。そのときスコップや竹箆を動かし、眼を配り、手ごたえの感触を確かめる。いかにも体験的経験がモノをいう。だからこそ発掘はそのまま自分史の中にはっきりと刻みこまれるのである。

私共は、木曾の開田高原で、縄文時代草創期の遺跡と掘り出された遺物と対面し、貴重な体験をし、自らの原風景を一枚加えたのである。遠景の御岳山、中景に市郷学園の研修センター棟があって、周辺に仲間がいた。顔の表情や体つき、そして藪のある仕草がなつかしい。発掘は考古学ばかりでなく、考古学スル自分の世界に個性を与えてくれるものごとくに思われる。

それ故、実習報告書は考古学的成果であるとともに、完成に到るまでにかかわった諸々の記録でもある。石器を実測し、原稿を書き、頁の割り付けをしなが、考古学実習室の明りは大学中で最も遅くまで煌々としていた。こうして第7冊の刊行を迎えたこと、その実習生の努力を、衷心より誇りに思う。そして、これが少しでも研究の資となれば幸甚とするものである。また、諸氏の御叱正を乞い願うものである。

このたびの実習調査の実施においては、いつもながら長野県教育委員会文化課、開田村神田正知村長、千村博男教育長をはじめとする開田村教育委員会の御指導や御鞭撻を賜った。また、市郷学園理事長末岡照章氏は宿舍ならびに諸設備の提供をこのたびも全く無条件で許された。洵に感謝に耐えないところである。さらに、山下生六、神村透先生および遠路はるばる激励に馳せ参じて下さった諸先輩、友人の御好意はうれしい限りであり、ここに明々銘記する。

そして、発掘ならびに遺跡確認調査において御理解と御協力をいただいた、地元の青樹健一、奥原彰、村上和幸の諸氏と御家族、食事などの裏方をお引き受けいただいた巖見商店の皆様へ感謝と御礼を申し述べる次第である。

國學院大學考古学研究室

小林達雄

## 例 言

1. 本書は昭和63年度國學院大學文学部考古学実習の一環として実施した長野県木曾郡開田村小馬背遺跡における発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は國學院大學文学部長荻久保泰幸が主体者となり、文学部教授小林達雄が担当した。また、文学部助教授吉田恵二・考古学資料館学芸員青木豊・文学部助手谷口康浩が調査員として専従し、考古学実習生8名がこれにあたった。
3. 発掘調査は昭和63年9月4日から9月13日まで、10日間にわたって実施した。
4. 遺物・記録類の整理作業および本書の編纂作業は國學院大學考古学実習室において行った。
5. 発掘調査および整理作業には、実習生のほか多くの方々の参加協力を得た。芳名を巻末に記して謝意を表する次第である。
6. 本文の執筆は小林達雄の指導のもとに実習生が分担した。文責は本文目次に記した。写真撮影は下平・宇田が担当した。
7. 本書の編纂は小林達雄の指導のもと、実習生全員で行い、吉田恵二・青木豊・谷口康浩の助言を得た。
8. 本書の写真図版に掲げた遺物写真は、図版6、9、24、27を除いて原寸大である。
9. 遺跡の地図は国土地理院発行の1:50000木曾西野の一部を転載した。
10. 今年度の調査において出土した遺物および記録類は、國學院大學において保管している。
11. 昭和43・44年の調査による小馬背・西又II遺跡の出土遺物を、当時の調査担当者神村透氏より借用し、その資料紹介を併せて掲載した。

# 目 次

序	小林達雄
例言	
目次	
	頁
第 I 章 調査に至る経緯	(小暮) 1
第 II 章 開田高原の遺跡群	(山本) 2
第 1 節 小馬背遺跡の位置と環境	2
第 2 節 旧石器時代・縄文時代草創期の主要遺跡	2
第 III 章 昭和63年度発掘調査	(赤塩) 5
第 1 節 調査の方針と経過	5
第 2 節 発掘調査日誌(抄)	5
第 IV 章 小馬背・西又II遺跡出土遺物	9
第 1 節 小馬背遺跡調査区出土の遺物	(足立) 9
第 2 節 西又II遺跡採集の遺物	(神山) 9
第 V 章 資料紹介——昭和43・44年発掘調査の出土遺物	12
第 1 節 小馬背・西又II遺跡における発掘調査の概要	(下平) 12
第 2 節 小馬背遺跡出土の縄文時代草創期遺物	13
第 1 項 土器	(下平) 13
第 2 項 石器	(中村・赤塩) 14
第 3 節 西又II遺跡出土の縄文時代草創期遺物	22
第 1 項 土器	(下平) 22
第 2 項 石器	(小暮・足立) 24
第 4 節 石器に関する考察	27
第 1 項 小馬背・西又II遺跡出土の有舌尖頭器の比較	(足立) 27
第 2 項 尖頭器状素材について	(中村) 27
第 3 項 有舌尖頭器の剥離技術について	(宇田) 28
第 VI 章 調査成果と問題点	(宇田) 30
引用参考文献	31
発掘関係者一覧	32
写真図版 1～30	

## 挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡……………	3	第9図	小馬背遺跡出土の石器(3)……………	18
第2図	遺跡の地形と調査区……………	6	第10図	小馬背遺跡出土の石器(4)……………	19
第3図	小馬背遺跡の土坑……………	7	第11図	小馬背遺跡出土の石器(5)……………	20
第4図	小馬背遺跡調査区出土の石器……………	10	第12図	西又II遺跡出土の土器……………	23
第5図	西又II遺跡採集の石器……………	11	第13図	小馬背・西又II遺跡出土の有舌尖頭器とその比較……………	25
第6図	小馬背遺跡出土の土器……………	13	第14図	小馬背・西又II遺跡出土の槍先形尖頭器とその重量……………	26
第7図	小馬背遺跡出土の石器(1)……………	16			
第8図	小馬背遺跡出土の石器(2)……………	17			

## 表 目 次

第1表	小馬背遺跡出土石器計測値一覧…21	第2表	西又II遺跡出土石器計測値一覧…28
-----	-------------------	-----	--------------------

## 図 版 目 次

図版1	小馬背遺跡現状	図版16	西又II遺跡調査風景
図版2	土坑確認状況・土坑発掘状況	図版17	西又II遺跡採集の石器
図版3	グリッドの設定風景・発掘調査風景	図版18	西又II遺跡出土の石器(1)
図版4	小馬背遺跡調査区出土の石器	図版19	西又II遺跡出土の石器(2)
図版5	小馬背遺跡出土の石器(1)	図版20	西又II遺跡出土の石器(3)
図版6	小馬背遺跡出土の石器(2)	図版21	西又II遺跡出土の石器(4)
図版7	小馬背遺跡出土の石器(3)	図版22	西又II遺跡出土の石器(5)
図版8	小馬背遺跡出土の石器(4)	図版23	西又II遺跡出土の石器(6)
図版9	小馬背遺跡出土の石器(5)	図版24	西又II遺跡出土の石器(7)
図版10	小馬背遺跡出土の石器(6)	図版25	西又II遺跡出土の石器(8)
図版11	小馬背遺跡出土の石器(7)	図版26	西又II遺跡出土の石器(9)
図版12	小馬背遺跡出土の石器(8)	図版27	西又II遺跡出土の石器(10)
図版13	小馬背遺跡出土の隆起線文土器	図版28	西又II遺跡出土の隆起線文土器(1)
図版14	西又II遺跡現状	図版29	西又II遺跡出土の隆起線文土器(2)
図版15	西又II遺跡試掘状況・土層地積状況	図版30	西又II遺跡出土の隆起線文土器(3)

## 第I章 調査に至る経緯

國學院大學文学部では、昭和54年度以来毎年夏期休暇を利用して各地で発掘調査を実施してきた。これは考古学実習の授業の野外活動の一環として実施しているものであるが、そのねらいは一つには依然として実態のはっきりしない縄文時代草創期の研究に置かれており、これまでも少なからぬ成果を挙げることができた。特に新潟県中魚沼郡中里村王遺跡<sup>54</sup>では、当時全国的にあまり知られていなかった円孔文土器がまとまって出土し、隆起縄文系土器や多縄文系土器に加えて草創期の土器編年を大きく見直す必要性が指摘されたのである。木曾開田高原における小馬背遺跡の調査も、そうした一連の研究の一環をなすものである。

開田高原では、明治44年、東京帝国大学人類学教室の松村瞭が開田村西野、王滝村滝越において最初の考古学的調査を実施した(松村、1911)。これを契機として幾つかの遺跡が知られるようになり、昭和6年には藤森栄一が西筑摩郡石器時代地名表に開田村所在の12遺跡を挙げている(藤森、1931)。戦後岩宿遺跡の発見によって旧石器時代の存在が確認されると、この開田高原も菅平、野辺山高原などととも遺跡の密集地として注目されるようになり、旧石器および縄文時代草創期の具体的な研究が展開された。その嚆矢となったのは、昭和31年に藤沢宗平ほか信州ローム研究会によって実施された古屋敷遺跡の発掘調査であった。またそれに続く柳又遺跡の調査では、細石刃・ナイフ形石器などとともに、立川ポイントと同様の有舌尖頭器が発見され、「柳又ポイント」の名で広く知られるところとなった。それは土器を伴っていた点で縄文文化の起源に関する研究に重要な問題提起をなし、この発見は学史上きわめて重要視されるものである。これを契機として小馬背遺跡、西又遺跡が矢継ぎ早に調査され、縄文時代草創期に属する同様の石器群が確認された。

小馬背遺跡は、昭和43年神村透らによって最初の発掘調査がなされ、その際に有舌尖頭器・槍先形尖頭器など草創期の遺物が多数出土した。昨年9月には本学が調査を実施しており、有舌尖頭器や石鏃が得られている。今年度は遺跡の範囲確認および昭和43年に検出された土坑の再確認などを目的として、昨年度の調査区の南東にグリッドを設定して発掘を行った。一方、期間中に小馬背遺跡の調査と並行して西又遺跡・柳又遺跡など周辺遺跡の踏査を行った。

今回の調査を実施するにあたっては、長野県教育委員会ならびに開田村教育委員会、神田正知村長、千村博男教育長、山下生六先生、神村透先生よりご指導とご支援を賜った。また、学校法人市邨学園理事長末岡照章氏(73期院友)には、50名にも及ぶ調査参加者のために宿舍として同学園の開田村研修センターを提供していただいたばかりでなく、寸暇を削いで現地まで激励のためにお出いただいた。同研修センターの古畑正美氏、食事をお世話いただいた嶽見旅館、また遠路見学においでくださった大勢の方々にもさまざまな援助をいただいた。ここに調査の成果を報告するとともに心から感謝する次第である。

## 第II章 開田高原の遺跡群

### 第1節 小馬背遺跡の位置と環境

小馬背遺跡は長野県木曾郡開田村西野下向に所在し、木曾川支流の西野川右岸の河岸段丘上に立地する。遺跡の所在する開田高原は、御岳山(3063m)の北東の裾野にあたり、平均標高約1100mの比較的起伏の少ない準平原である。その中央部には、西野川に注ぐ冷川が貫流して高原を南北に二分しており、南側を恩田原、北側を下の原と称している。小馬背遺跡は北側の下の原にあり、西野川に沿った高原の東縁に位置する。

この付近の気候は、内陸性の高冷地気候帯に属するため、夏でも日中の気温が20℃前後と涼しく、1月の平均気温は-2℃にも下がる。しかし、内陸盆地としては比較的降水量が多く、年間2000mmを越す。高原全体に針葉樹林帯が広がっている。

### 第2節 旧石器時代・縄文時代草創期の主要遺跡

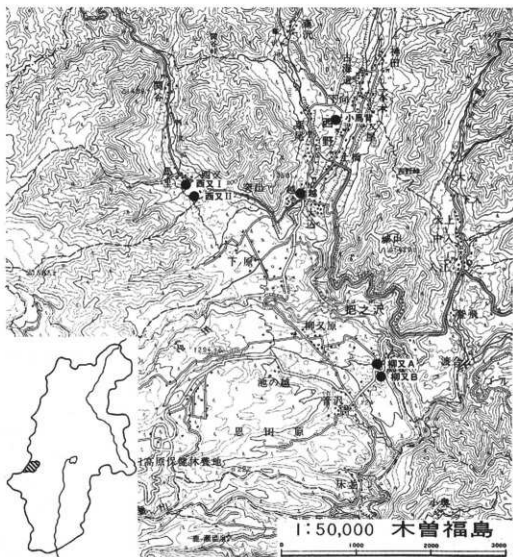
開田高原には、数多くの遺跡があり、その時代も各期にわたっている。神村透氏の御教示によると、現在までに46遺跡が確認されており、その内訳は旧石器時代8、縄文時代草創期8、早期16、前期18、中期4、平安時代以降13となっている。ここでは、発掘調査を実施した小馬背遺跡ならびに関連の深い旧石器時代・縄文時代草創期のいくつかの遺跡を取り上げて簡単に紹介しておく。

**小馬背遺跡** 開田村西野下向に所在し、西野川右岸の河岸段丘上に位置する。現在の西野川河床との比高は約10mを測る。昭和43年11月23日から25日にかけて山下生六、神村透、樋口昇一氏らにより最初の発掘調査が行われた。その結果、小判形の土坑が確認され、その覆土や周辺から有舌尖頭器、槍先形尖頭器、片刃打製石斧などの縄文草創期に属する多量の石器が出土した。また、それらに伴って陸起線土器の破片が数点出土した(樋口・森嶋・小林、1965)。

**古屋敷遺跡** A・B・Cの3地点の遺跡が確認されている。なかでも古屋敷A地点の調査は、開田高原における最初の発掘調査であり、その後活発化する旧石器時代・縄文時代草創期の考古学的研究の端緒をなすものであった。調査は昭和24年(1949)以来数次にわたって行われたが、概要は次のとおりである。

(古屋敷遺跡A地点) 開田村末川の西方、古屋敷と呼ばれる台地の東北縁に位置する。昭和31年8月、藤沢宗平氏を中心とする信州ローム研究会によって発掘調査が行われ、槍先形尖頭器、半月形石器などが出土した。槍先形尖頭器の中には、長さ14cm、幅6cmの大形のものが含まれ、長野県上伊那郡箕輪村神子柴遺跡出土の石槍とともに注目を集めた。





第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

(古屋敷遺跡B地点) A地点遺跡より南へ200mの古屋敷台地東縁辺に位置する。昭和34年、森嶋稔氏によって発掘調査され、小形の石刃、石核、槍先形尖頭器などが出土した。

(古屋敷遺跡C地点) B地点遺跡より西へ400mの地点に位置する。先刃撻器、石核、石刃などが出土している(樋口・他、前掲)。

柳又遺跡A地点 柳又原と呼ばれる思田原の東側は、西野川によって開析され比高30mの急崖をなしているが、柳又遺跡はその柳又原の縁辺部、開田村西野柳又に所在する。昭和34年から37年にかけて、樋口昇一、森嶋稔氏らによって4次にわたる発掘調査が行われた。その結果、ローム層中からナイフ形石器と細石刃によって特徴づけられる二群の旧石器時代石器群が出土

し、また漸移層および黒土層中からは有舌尖頭器や槌刃、石鏃をはじめとする縄文時代草創期の石器が出土した（樋口・他、前掲）。

柳又遺跡B地点 同じく開田村西野柳又に所在し、A地点からは東南へ200mの距離にある。A地点の調査と並行して昭和34年から37年にかけて発掘調査が行われた。その結果、ローム層中からナイフ形石器をはじめ、石刃、搔器、石核、礫器などが、漸移層および黒土層中からは、多数の有舌尖頭器や尖頭器、搔器、石鏃などの石器と共に土器が出土している。それらの土器は器面に繊維状の細かい圧痕が残されている点に特色がある。また、隆起線文や爪形文を施したのも含まれ、隆起線文系土器と考えられる（樋口・他、前掲）。

柳又遺跡A・B両地点におけるこうした一連の調査の結果、①旧石器時代のナイフ形石器の文化、②細石刃の文化、③縄文時代草創期に属する有舌尖頭器の文化が層位的に検出されたことは、旧石器時代から縄文時代への移行期の様相究明に大きな役割を果たした。特に柳又ポイントと呼ばれる有舌尖頭器の発見は、縄文草創期の研究を飛躍的に進展させる一つの大きな契機となったのである（樋口・他、前掲）。

西又I・II遺跡 下の原の北西部にあたる西又川西岸の傾斜地に位置し、地籍は開田村西野馬里にあたる。I遺跡は発掘調査が行われていないが、II遺跡は昭和44年10月10日から12日にかけて樋口昇一、神村透氏らが最初の調査を行った。その結果、白石を6m四方に数個置いた石器製作址が確認され、その周辺から槍先形尖頭器、有舌尖頭器、片刃打製石斧、石鏃などの石器と隆起線文を含む土器片97点が出土した。それらの出土遺物は調査を担当した神村透氏が整理、保管していたが、この度借用して資料紹介させていただくことにした（第V章）。

越遺跡 開田村西野越に所在する。下の原の縁辺の西野川に臨む台地上にあり、本格的な調査は行われていないが、試掘の結果、黒色土層およびローム層下20cmにわたって、縄文時代草創期から旧石器時代にかけての遺物包含層が確認されている。

子の原高原遺跡群 御岳山の反対側にあたる岐阜県大野郡高根村には、標高約1500～1800mの子の原高原が広がっている。この子の原高原にも旧石器・縄文時代の遺跡があり、今後の調査によって遺跡数かなり増加することが予想される。その一つである池の原遺跡からは、旧石器時代のナイフ形石器、片面加工の小形尖頭器、両面加工尖頭器、石刃などが出土している。詳細は不明であるが、比較的良好な旧石器時代の遺跡として注目される（『岐阜県史』通史編）。

このように御岳山麓に広がる高原地帯には、旧石器時代ならびに縄文草創期の遺跡が多数残されている。今後、分布調査などの基礎的調査を重ね、遺跡の分布や密度を把握するとともに、組織的な重点調査によって、当時の社会的・文化的様相を明らかにしていく必要がある。

## 第三章 昭和63年度発掘調査

### 第1節 調査の方針と経過

昭和43年11月に山下生六、神村透氏らによって行われた小馬背遺跡の発掘調査では、土坑<sup>III</sup>を中心とした狭い範囲から有舌尖頭器や槍先形尖頭器が出土したことが報告されている（伊深、1971）。そこで、今年度の調査では当時の調査地点を中心に遺物の分布と遺跡の広がり把握することを目的に、昨年度の発掘区域の南東に接して調査区を設けた。昭和43年の調査区域の正確な位置は、正式な報告や記録類がないためすでに不明となっていたが、第1次調査の発掘区と崖線の間広くグリットを定め、当時確認された土坑の再発掘をとりあえずの日標として調査を開始した。調査の対象となったのは、昨年度の調査区に隣接した約160㎡の区域であり、そのうち発掘したグリットは第2図に斜線で示した。なお基本層序は次のとおりであるが、発掘区の全体が昭和43年の調査地点と重複していたためロー5、ロー7、ハ-5、ハ-6区などでは埋土となっていた。

I a 層 耕作土。

I b 層 天地返しのために耕作機械により攪乱を受けた土。暗黄褐色土と黒褐色土が縞模様  
に混在している。

II 層 黒褐色土。粘性は弱いが良くしまっている。

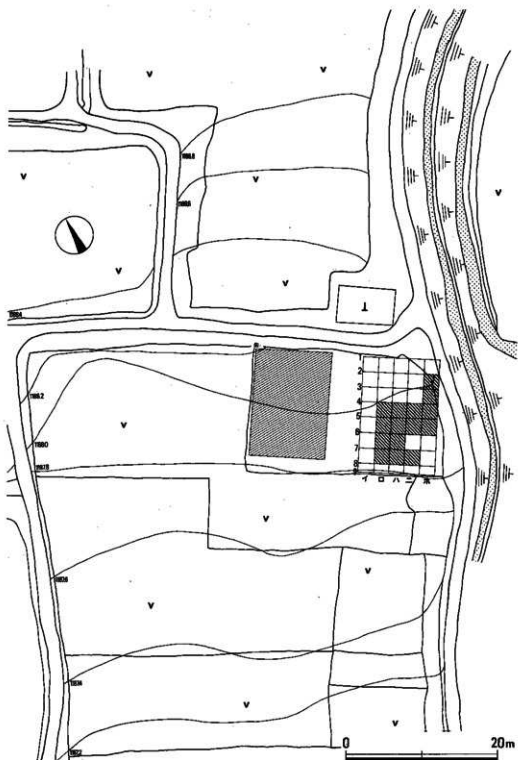
III 層 暗黄褐色土。ローム土と黒色土との漸移層である。

IV 層 明黄褐色土（ローム層）。

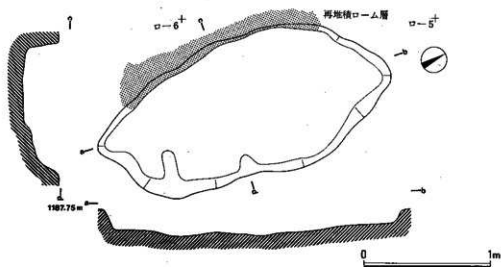
土坑について 今回の調査では昭和43年の調査で検出された土坑の再調査を行ったが、この掘り込みが人為的なものか否かについては再考の余地がある。確認された土坑は長さ約2m幅約1mの小判形を呈していた。そして付近には遺物が集中し、土坑内からも槍先形尖頭器や数点の刺片が出土した。このことは昭和43年の状況と符合する。しかし、埋土を掘り上げ精査した結果では、ローム層を掘り込んではいるものの、全体に凹凸が著しく平面ブランもはっきりしない。また掘り込みの側面の一部では、黒色土の落ち込みの上にロームが再堆積している状況も見られた。こうしたことから、いわゆる風倒木痕の可能性も考えられる。第3図にはローム土の再堆積した範囲（現状）をスクリーントーンで示した。

### 第2節 発掘調査日誌(抄)

今年度の調査期間中は天候不順で、好天に恵まれたのはわずか4日間であった。そのため調査が予定通りはかどらなかったのが実情である。調査期間は昭和63年9月4日から13日までの



第2図 遺跡の地形と調査区



第3図 小馬背遺跡の土坑

9日間にわたった。調査には実習生8名のほか、國學院大學で考古学を専攻する約43名の学生をはじめ、青山学院大学、駒沢大学、東京大学などからの特別参加者も加わり、調査参加者総数は56名を数えた。また期間中にわたり、地元の方々のみならず遠方からも大勢の見学者が訪れ、さまざまな形で支援をいただいた。

9月5日(雨) 第1次調査で設定した杭を基準にグリットを延長する予定であったが、これらの杭が耕作により全部抜去されていたため、調査区の畑の北縁に沿って杭を打ち、新たにグリットを設けた。標高仮原点は昨年度の調査に用いた値をそのまま使い、1180.20mとした。また調査前に表面採集を行った結果、10数点の剥片が採集された。午後からは雨足が強まったため、「伝統的考古学からの脱皮」と題した小林達雄教授の講義と縄文時代草創期についての勉強会をひらいた。

9月6日(雨) 雨天で調査を行えなかったため、開田村郷土館の見学を行った。

9月7日(晴) ハー4、ニー4、ニー5、ホー4区の発掘を開始し、剥片が30点ほど出土した。また昭和43年に検出された土坑の再確認の作業を始めた。夕方からは滞在する研修センターに王滝中学校教諭神村透氏を招き、「開田高原の考古学的調査」と題して、開田高原における考古学研究史と小馬背、西又II遺跡の発掘調査の成果等について講演していただいた。

9月8日(晴) 昭和43年に検出された土坑の再確認を目標に、調査区の中央部にあたるハー4、ハー5、ニー4、ニー5区を発掘したが確認できなかった。そこで南側のハー6区を掘り下げたところ、それらしい掘り込みが認められたため周辺のロー6、ロー7、ハー7区を掘り下げた。一方、調査区の東縁にあたるホー4、ホー5区は、昭和43年の調査の未発掘区域にあたり、ホー5区から剥片20点ほどが出土した。

調査参加者のうち実習生を除く約30名は、柳又遺跡A地点ならびに西又II遺跡で表面採集を行う予定であった。折しも柳又遺跡A地点では耕作によってローム層が地表に露出し、細石刃、細石刃核、石刃などの旧石器時代遺物が散在していたため、この日より同地点において緊急調査を実施することにし、表面採集と層序確認のための試掘を行った。18名が柳又遺跡A地点での作業に従い、6名が西又II遺跡に赴いた。またこの日の午後、乙益重隆教授が調査指導のため現地入りした。

9月9日(晴) 昨日確認した掘り込みは、精査の結果一辺2mの正方形であることがわかり、昭和43年の調査の際の深掘りのグリットであることが判明した。このためさらに周辺に発掘区を拡張したところ、ロー6区の北端から埋土のつまった掘り込みがあらわれた。これはロー6区からロー5区にまたがっていた。この日も調査参加者のうち18名が柳又遺跡A地点、14名が西又II遺跡に赴き、表面採集ならびに試掘を行った。また吉田恵二助教授が調査指導のため現地入りした。

9月10日(曇) 昨日検出した土坑を精査したところ付近に遺物が集中し、土坑内からも7点の剥片と1点の槍先形尖頭器が出土した。この日も調査参加者のうち13名が柳又遺跡A地点、11名が西又II遺跡に赴き、表面採集ならびに試掘を行った。また同夜には研修センターの校庭でファイヤーストームを囲み、市部学園理事長末岡照章氏と大勢の見学者を混えての懇親会を開催した。

9月11日(雨時々曇) 雨の合間をぬって土坑の実測を行い、それと並行して発掘区の一部の埋め戻しを開始した。柳又遺跡A地点と西又II遺跡の調査は困難と判断し、その他の調査参加者はこれまでに出土した遺物の水洗と注記を行った。

9月12日(晴) 小馬背遺跡では土坑の写真撮影を行い、その後発掘区の埋め戻しを行った。柳又遺跡A地点でも13名が、西又II遺跡でも11名が埋め戻しを行い、各調査地点とも調査を終了した。

註(1) 昭和43年の調査報告(伊深、1971)では、この土坑は「ビット」と記載されている。

註(2) 今回の調査期間中に柳又遺跡A地点において採集された遺物については、来年度の調査報告書の中で資料紹介する予定である。

註(3) 西又II遺跡において採集された遺物については第IV章で報告する。

## 第Ⅳ章 小馬背・西又Ⅱ遺跡出土遺物

### 第1節 小馬背遺跡調査区出土の遺物

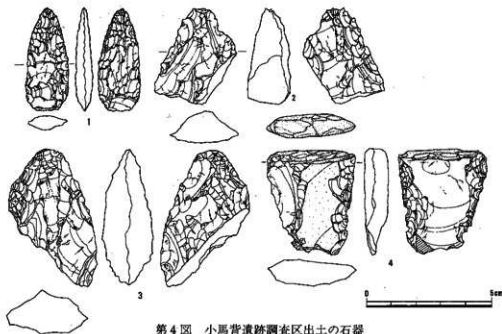
今回の調査では、石器・剥片が合計657点出土した。土器は出土しなかった。石器には、槍先形尖頭器3点、スクレイパー1点があり、その他は剥片・砕片である。石材別にみると、チャートが644点(98%)を占め、その他に玻璃質安山岩、黒曜石がわずかにみられる。第4図に掲げた遺物は昭和43年の調査で出土した資料(第Ⅴ章参照)と同様に、縄文時代草創期の遺物と考えられる。

**槍先形尖頭器(1~3)** 1は玻璃質安山岩製で、現長34mm、最大幅15mm、最大厚6mm、重量4.0gである。左側縁が多少破損している。基部が平たく、細身の形状をしている。ロー6区と、ロー5区とにまたがって検出された土坑内から出土した。この土坑は、昭和43年の調査で確認されたものであり、その折にも、この土坑内から有舌尖頭器、石斧、剥片など多量の遺物が出土している。2は先端部の破片で、チャート製である。現長51mm、最大幅43mm、最大厚17mm、重量16.7gである。両面に調整が施されているが粗い。ハ-4区耕作土から出土した。3はチャート製で、現長49mm、最大幅31mm、最大厚29mm、重量23.2gである。下半部を欠損している。先端はあまり鋭くない。ハ-6区耕作土から出土した。

**スクレイパー(4)** チャート製で、現長43mm、最大幅34mm、最大厚9mm、重量18.6gである。縦長の剥片の両側縁に、両面からの調整によって刃部を作り出している。ハ-5区耕作土から出土した。

### 第2節 西又Ⅱ遺跡採集の遺物

西又遺跡は、木曾郡開田村西野馬里に所在し、開田高原北西部の西又川西岸に位置する。昭和44年10月9日から10月13日、樋口昇一・神村透氏を中心として西又Ⅱ遺跡の発掘調査が行なわれた。西又Ⅱ遺跡は、800平方メートルほどの広がりをもつことが予測される。当時発掘されたのは200平方メートルである。発掘の結果、有舌尖頭器18点、槍先形尖頭器27点、片刃打製石斧3点、剥片約10kg、土器片97点など縄文草創期の遺物がまとめて出土した。また、それにともない6m四方中に台石を3個配置した石器製作址が検出された(神村 1970、伊深 1971、1974)。約10kgが出土したとされる剥片の中には、尖頭器の製作過程に生じるいわゆるポイントフレイクが特徴的に含まれており、この場所で有舌尖頭器や槍先形尖頭器を集中的に製作していたことが考えられる。有舌尖頭器や槍先形尖頭器の出土量は、柳又遺跡、小馬背遺跡と比較しても抜群に多く、おそらく拠点的な石器製作地だったのであろう。またその後も地主奥原彰



第4図 小馬背遺跡調査区出土の石器

氏等によって、有舌尖頭器、槍先形尖頭器などが多量に採集されており、昨年度の小馬背遺跡発掘調査報告書（小林編 1988）の中で、その一部を資料紹介させて頂いたところである。今回の調査期間中にも表面採集や試掘を行なったが、その結果槍先形尖頭器などを採集することができた（第5図 図版17）。

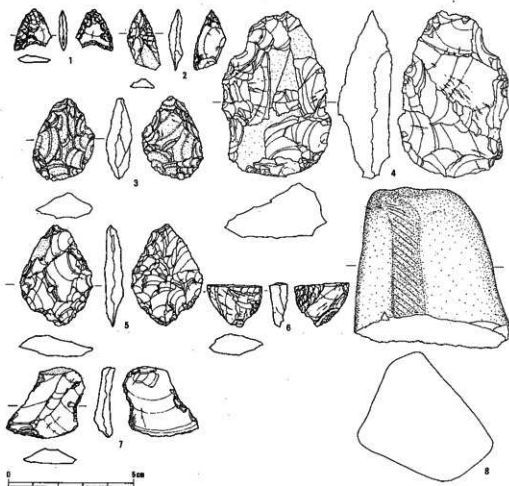
**石鏃 1** はチャート製で現長23mm、最大幅11mm、最大厚5mm、重さ0.6gを測る。片側の脚部先端を欠損しているが、ほぼ正三角形を呈する。左右対称形で浅い抉入によって基部を作り出した凹基無茎石鏃である。

**尖頭器 2** は有舌尖頭器の先端部の破片と思われる。玻璃質安山岩製で現長23mm、最大幅11mm、最大厚5mm、重さ1.1gを測る。側縁部の加工中に先端部が折損したものとらしく、表面の中央の剝離面はポジティブな面をなす。3は玻璃質安山岩製で現長33mm、最大幅23mm、最大厚10mm、重さ6.3gを測る。左右対称でなく、先端部や側縁の加工も十分でない。4はチャート製で現長67mm、最大幅43mm、最大厚22mm、重さ58.6gを測る。両面に極めて粗い調整がなされているだけで、未製品と思われる。5はチャート製で現長40mm、最大幅30mm、最大厚8mm、重さ8.9gを測る。左右対称でなく、先端や側縁の加工が十分でない。6は槍先形尖頭器の基部の破片で、チャート製である。現長17mm、最大幅14mm、最大厚4mm、重さ2.9gを測る。

**二次加工のある剝片 7** は剝片の両側縁に凹刃状の二次加工がみられる。チャート製で現長33mm、最大幅23mm、最大厚7mm、重さ5.1gを測る。

**磨石 8** はいわゆる特殊磨石である。断面四角形状の砂岩の自然礫を素材として用い、その





第5図 西又II遺跡採集の石器

稜線の部分に斜方向の摩擦による幅約13mmの摩擦痕がみられる。約半分の破片であり現長60mm、最大幅55mm、最大厚49mm、重さ227.0gを測る。縄文時代早期に属するものであろう。

所述のように、これまでかなりの量の草創期遺物が採集されているが、試掘調査の結果では、耕作土の下には全面にわたってローム層が露出しており、残念ながら草創期の包含層は残されていない。ただし、遺跡の北側を流れる沢と畑地の間には未開墾の林が残されており、その部分には草創期の包含層が残されている可能性がある。

## 第V章 資料紹介

### —昭和43・44年発掘調査の出土遺物—

#### 第1節 小馬背・西又II遺跡における発掘調査の概要

小馬背遺跡・西又II遺跡は、柳又遺跡A地点・B地点とともに有舌尖頭器や槍先形尖頭器の出土地として早くから知られ、開田高原における代表的な遺跡となっている。両遺跡の内容については、第II章ですでに紹介したが、ここでは小馬背・西又II遺跡のこれまでの調査の概要をあらためて整理するとともに、主要な出土遺物を資料紹介する。小馬背・西又II遺跡の遺物は、調査を担当した神村透氏（当時長野県教育委員会）が整理・保管していたものだが、このたびこれらを借用し、実測図等を掲載させていただくことになった。同氏の御厚意に感謝するとともに、木曾開田高原における考古学的調査をこれまで主導してこられた熱意に敬意を表する次第である。

小馬背遺跡は、昭和42年、長野県教育委員会が開田高原における遺跡の分布調査を行った際に、有舌尖頭器の発見により注目され、翌43年11月22日～25日に木曾教育会・郷土館調査部事業の一環として、山下生六・神村透氏が最初の発掘調査を実施した。2m×2mのグリッド法により、約140㎡を発掘した結果、河成段丘の崖線に沿って有舌尖頭器や加工の粗雑な尖頭器、石鏃、片刃打製石斧、土器片などが多量に出土した。神村氏の御教示によると、それらの出土点数は、有舌尖頭器18点、槍先形尖頭器63点、搔器2点、石鏃1点、片刃打製石斧1点、石核3点、剥片約10.5kg、土器片4点となっている。また、最大長3.2m、最大幅1.0m、深さ0.34mの半月形の土坑が検出されたが、その内外からも有舌尖頭器や片刃打製石斧、槍先形尖頭器、剥片が出土した。この昭和43年度小馬背遺跡の調査の概要と出土遺物については、木曾教育会・郷土館紀要第5号（伊深、1970）に簡単な報告と紹介がある。

一方、西又II遺跡も、小馬背遺跡と同様昭和42年の長野県教育委員会による分布調査の際に発見された遺跡である。遺跡の所在地は下の原地跡にあたるが、すでに別に下の原遺跡の名称が用いられていた事情から、付近の集落名を取って西又遺跡と命名された。そして集落付近の小規模な遺跡を西又I、西又川に注ぐ小沢に沿った小規模な遺跡を西又II遺跡と称した。発掘により縄文時代草創期の遺物が多量に出土したのは後者の西又II遺跡の方である。この調査は木曾教育会郷土館資料部の事業として、昭和44年10月9日～13日にかけて神村透・樋口昇一氏らが実施した。2m×2mのグリッド法を用い、約156㎡を発掘した結果、6m四方に台石を数個置いた石器製作址と考えられる遺構が検出された。またその遺構を中心として有舌尖頭器や加工の粗雑な槍先形尖頭器、搔器、挟入状搔器、石鏃、片刃打製石斧、土器片など多量の遺物が出土した。その出土点数と内訳は、神村氏の御教示によると、有舌尖頭器92点、石鏃6点、

片刃打製石斧4点、石核3点、搔器37点、挟入状搔器14点、フレイク約10kg、土器片80点となっている。西又II遺跡の調査概要および出土遺物については「木曾教育」第36・44号（伊深1971・1974）に報告と紹介がある。なお、その後も土地所有者である奥原彰氏等によって丹念な遺物採集が続けられており、その一部を昨年度の小馬背遺跡調査報告書に資料紹介させていただいたところである。

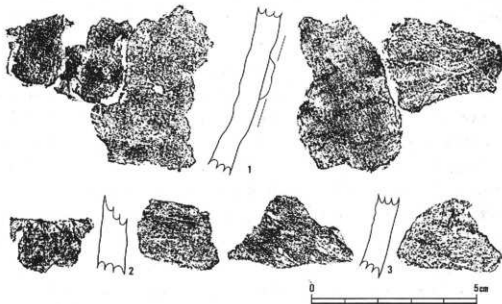
## 第2節 小馬背遺跡出土の縄文時代草創期遺物

### 第1項 土器（第6図）

昭和43年の調査では、有舌尖頭器などの石器群に伴って、4点の土器片が出土した（第6図）。いずれも縄文時代草創期の隆起線文系土器と考えられる。

1は、尖底深鉢の底部付近の破片とみられる。幅5mm、厚さ2mmの細隆起線文を縦に貼り付けたもので、隆帯上に刻目などの施文は見られない。外面は、丁寧に器面整形されているが、幅0.5mm～1mmほどの細かい繊維圧痕が顕著にみられる。また、そのほか器面には内外面共に繊維束状のものによる擦痕も認められる。器厚は7.8mmで、素地に0.5mm～3mmの白色砂粒および直径0.5mm程度の混入物を多量に含んでいる。おそらくその文様構成は、細隆起線文を口縁部には横位に胴部以下には縦位に貼付したものであろう。

2は、無文の胴部破片であり1と同一個体とみられる。両面に1と同様の擦痕が認められる。内面には幅0.5mm程度の細長い繊維圧痕がみられる。器厚は7.5mmで、素地は1と同様である。



第6図 小馬背遺跡出土の土器

3は、無文の胴部破片で緩い湾曲が認められる。外面には、斜方向の擦痕が認められ、内面には火華が付着している。器厚は6.5mmで素地に白色微粒子と極少量の雲母、および直径0.5mm程度の繊維状の混入物を含む。

これらは素地に植物繊維状の混入物を含み、器面にも繊維圧痕を残す点で共通の特徴を示しているが、こうした例は、近傍の柳又B地点をはじめ、岐阜県山県郡美山町九合洞窟（澄田・大参、1956）、愛媛県上浮穴郡美川村上黒岩岩陰（西田、1963）などの隆起線文土器に報告例がある。それらはいずれも「細隆起線文」と呼ばれる段階に属しており、小馬背遺跡の出土土器にも、それらと併行する編年の位置が与えられるであろう。

## 第2頁 石器（第7～11図）

昭和43年の調査では剥片約10.5kgを含む多量の遺物が出土したとされるが<sup>44</sup>、このたびは神村氏より借用した石器の内訳は、有舌尖頭器15点、槍先形尖頭器22点、尖頭器状素材6点<sup>45</sup>、石鏃1点、片刃打製石斧1点である。このうち、ここでは尖頭器状素材5点を除く主要な石器について資料紹介する。第7図・第8図に有舌尖頭器（縮尺 $\frac{1}{4}$ ）、第9・10・11図に槍先形尖頭器、尖頭器状素材および片刃打製石斧（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）の実測図を掲載した。各石器の計測データは一覧表にして示した（第1表）。なお、これらの石質別の内訳はチャート32、玻璃質安山岩4、頁岩2、安山岩2、黒曜石1となっている。

### 1. 有舌尖頭器（第7・8図1～15）

第14図（上）は小馬背遺跡出土の有舌尖頭器を、その形態と大きさ、長幅の比率に基づいて分類したものである。左のグラフは、先端から基部の端までを長さ、その長さ $l$ と直交し $e$ の両端を結ぶ線を幅として、その比率を表したものである。これによると、同遺跡出土の有舌尖頭器は大きく2つのグループに分類することができる。それらを仮にI類・II類と呼ぶ。

I類（1～4） 長さに対して比較的幅の広いずんぐりとした形状の一群である。長さの平均は32mm、平均重量は3.6gとなり、最も長いものは1で35mm、最も重いものは3で4.4gである。基部の幅1に対する長さの比率は平均1.44の値となる。また、基部の幅1に対する舌部の長さの比率は平均0.21となる。2にみられるように側縁部は湾曲したものが多し。石質はチャート3、頁岩1である。2ではまず側縁の一辺を先端から基部へ、次にもう一方の辺を基部から先端へと押圧剥離を行い、最後に舌部への調整を行なった剥離工程が観察される。

II類（5・6・12～14） 比較的幅狭の細身の一群である。基部の幅1に対する長さの比率は平均で2.38となり、I類よりも細長い形状を呈する。基部の幅1に対する舌部の比率は平均0.30となる。また、側縁部は5にみられるように直線的なものが特徴的である。折損している12・13・14の長さをそれぞれ42mm、55mm、54mmと推定すると平均はおよそ49mmとなる。5・6から重量の平均値をとると4.33gとなる。石質はチャート2点、玻璃質安山岩3点である。

本類は長さによってさらに大形、中形、小形の3種類に細分することができる。大形は13・14、中形は5・6、小形は12であり、長さの平均はそれぞれ55mm、47mm、46mmとなる。小形の12は幅1に対する長さの比率が3.06となり、最も細身である。調整剥離の順序を観察すると、まず片面の一辺の基部から先端へそれぞれ押圧剥離を施し、最後に舌部の加工を行なっていることがわかる。5・10・13では、いわゆる斜状平行剥離<sup>2)</sup>が良く観察できる。9は全体の剥離が粗く、舌部のつくり出しもほとんどないことから未製品と考えられる。

## 2. 槍先形尖頭器 (第9・10・11図17~30、32~35)

第13図は小馬背・西又II遺跡出土の槍先形尖頭器20点について、長さとの比率をグラフに表示したものである。また、重量についても5gごとの度数分布表を作成した。

小馬背遺跡出土の完形の4点についてみると、多少のばらつきはあるものの、長さは64mm~75mm、幅1に対する長さの比率は1.64~1.97、重量は22.8~38.6gの間にそれぞれおさまる。石質はいずれもチャートであるが、有舌尖頭器では節理のきわめて少ないチャートを用いているのに対し、槍先形尖頭器では節理の多く入ったチャートも使用している。17・19は完成品で、平均の長さ、重量はそれぞれ66mm、36gとなる。18は他のものと比べ調整が粗いことから製作途中のものと考えられる。なお32は尖頭器状素材である。

ちなみに西又II遺跡の場合は、完成品の長さ、重さの平均はそれぞれ60mm、17.3gであり、平均値を比較してみると、小馬背遺跡の方が若干大形の傾向がある。

## 3. 石鏃 (第8図16)

ほぼ正三角形を呈し、浅い挟入によって基部を作り出した凹基無茎石鏃である。先端には小さな突起を作り出している。

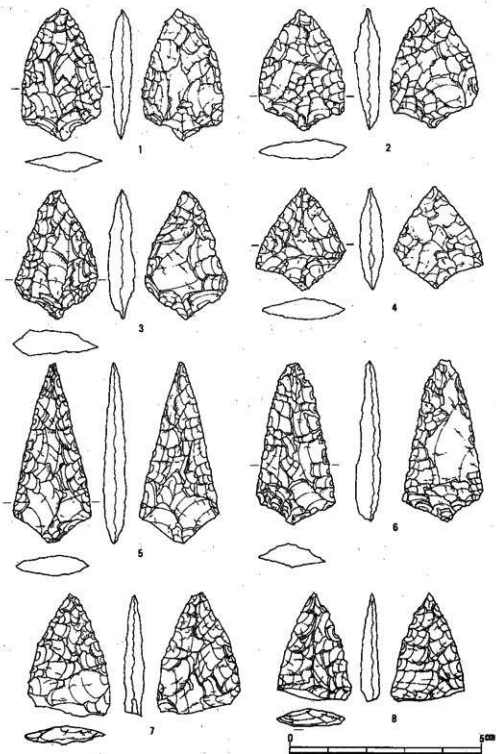
## 4. 片刃打製石斧 (第11図31)

長さ91mm、幅37mm、重量47.8gを測る。刃部がゆるやかに丸みを帯び、断面は三角形を呈する。石質は安山岩で、器面全体の風化が著しい。そのため剥離面をはっきりと観察できないが、表面では粗い剥離を全面に施した後、刃部に細かい剥離を行っている。縦長剥片を素材とし、裏面には主要剥離面が広く残されているほか打面が未加工のまま残されている。

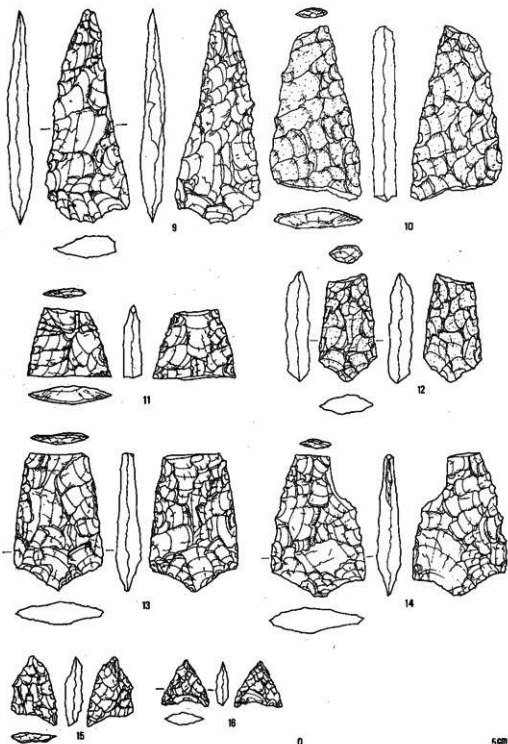
註(1) 神村透氏の御教示による。今回の調査期間中に神村氏をお招きし、「開田高原の考古学的調査」と題して講演していただいたが、その中で小馬背・西又II遺跡の発掘調査とその遺物について詳しい説明があった。

註(2) 剥片が数枚剥離されただけで、先端や刃部の作り出しがなく、石核状を呈する。これについては第4節第2項で詳しく述べる。

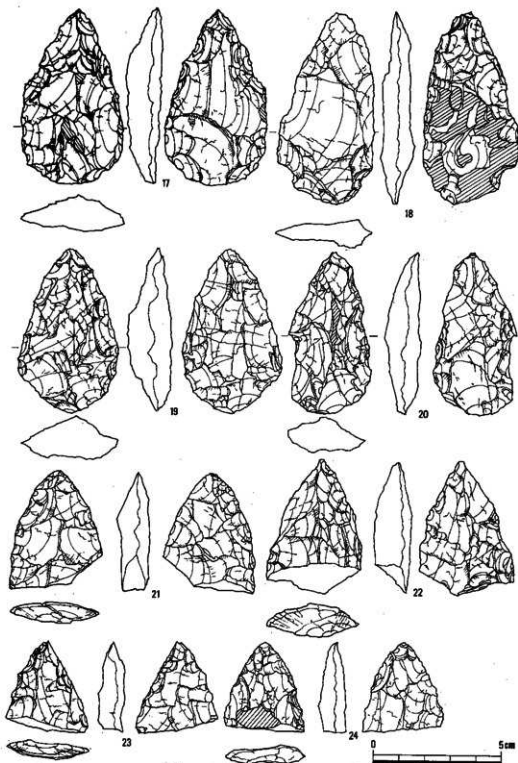
註(3) 半分重複しながら順を追って一方向的に押圧剥離を施していくため、結果として細長い棒状の剥離が斜めまたは平行に連なっているように見える。



第7図 小馬背遺跡出土の石器(1)

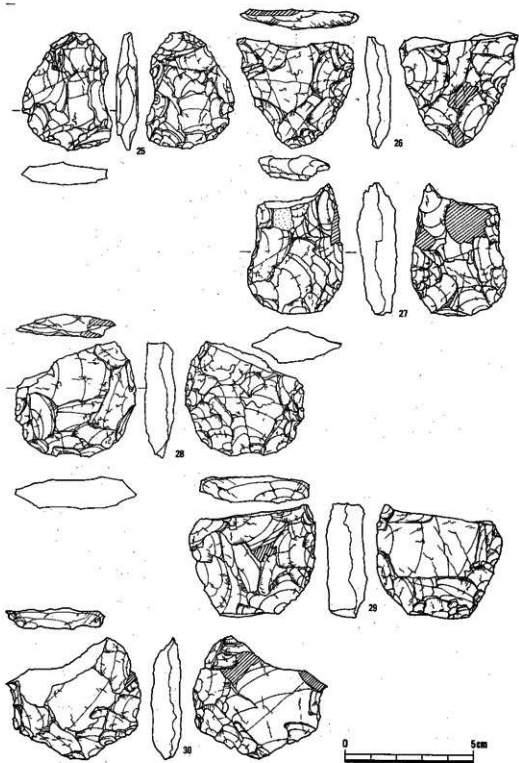


第8図 小馬背遺跡出土の石器(2)

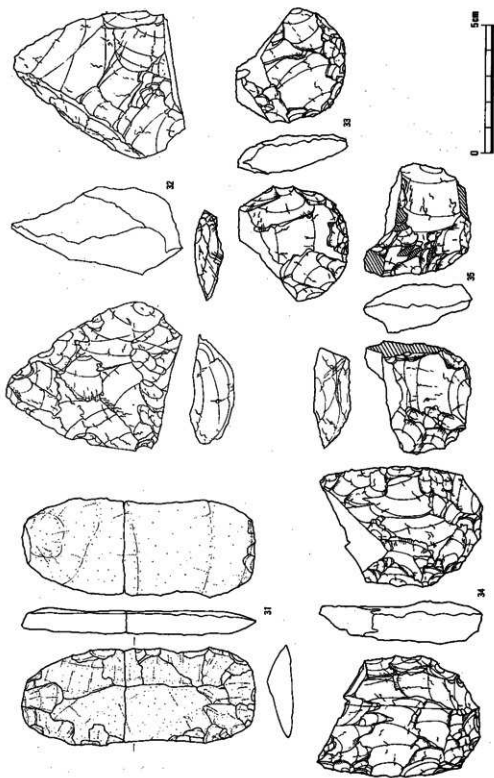


第9図 小馬背遺跡出土の石器(3)





第10図 小馬背遺跡出土の石器(4)



第11図 小馬青遺跡出土の石器(5)

第1表 小馬背遺跡出土石器計測値一覽

No.	図番号	器種	長(現長)(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	部位	重量(g)	石材
1	第7図-1	有舌尖頭器	35	22	6	完形	3.4	チャート
2	第7図-2	有舌尖頭器	32	23	7	完形	4.1	頁岩
3	第7図-3	有舌尖頭器	34	22	6	完形	4.4	チャート
4	第7図-4	有舌尖頭器	27	23	6	一部欠	2.6	チャート
5	第7図-5	有舌尖頭器	48	21	6	完形	3.6	玻璃質安山岩
6	第7図-6	有舌尖頭器	45	22	7	完形	5.0	チャート
7	第7図-7	有舌尖頭器	(32)	21	5	先端部	3.1	チャート
8	第7図-8	有舌尖頭器	(28)	19	6	先端部	2.2	チャート
9	第8図-9	有舌尖頭器	56	22	6	完形	6.1	チャート
10	第8図-10	有舌尖頭器	(46)	24	7	先端・基部欠	6.9	安山岩
11	第8図-11	有舌尖頭器	(17)	22	5	先端・基部欠	1.9	チャート
12	第8図-12	有舌尖頭器	(28)	15	6	基部	2.3	玻璃質安山岩
13	第8図-13	有舌尖頭器	(36)	23	7	基部	5.2	玻璃質安山岩
14	第8図-14	有舌尖頭器	(38)	25	7	基部	5.0	チャート
15	第8図-15	有舌尖頭器	(17)	12	5	先端部	0.7	玻璃質安山岩
16	第8図-16	石楯	12	13	3	完形	0.3	黒曜石
17	第9図-17	槓先形尖頭器	69	40	15	完形	38.6	チャート
18	第9図-18	槓先形尖頭器	75	38	13	完形	30.7	チャート
19	第9図-19	槓先形尖頭器	64	39	17	完形	33.8	チャート
20	第9図-20	槓先形尖頭器	64	33	14	完形	22.8	チャート
21	第9図-21	槓先形尖頭器	(47)	34	13	先端部	17.2	チャート
22	第9図-22	槓先形尖頭器	(52)	37	12	先端部	23.8	頁岩
23	第9図-23	槓先形尖頭器	(36)	32	11	先端部	9.0	チャート
24	第9図-24	槓先形尖頭器	(35)	31	11	先端部	10.2	チャート
25		槓先形尖頭器	(59)	32	10	先端部	16.4	チャート
26	第10図-25	槓先形尖頭器	(46)	35	9	一部欠	16.7	チャート
27	第10図-26	槓先形尖頭器	(43)	47	10	基部	18.1	チャート
28	第10図-27	槓先形尖頭器	(52)	38	16	基部	29.4	チャート
29	第10図-28	槓先形尖頭器	(46)	48	12	基部	28.9	チャート
30	第10図-29	槓先形尖頭器	(45)	50	15	基部	40.7	チャート
31	第10図-30	槓先形尖頭器	(48)	53	11	基部	28.5	チャート
32	第11図-31	片刃打製石斧	91	37	12	完形	47.8	安山岩
33	第11図-32	尖頭器状素材	(74)	58	34		112.2	チャート
34	第11図-34	槓先形尖頭器	(64)	48	16	基部	48.3	チャート
35	第11図-35	槓先形尖頭器	(42)	45	19	基部	30.6	チャート
36	第11図-33	槓先形尖頭器	(48)	45	16	基部	23.6	チャート
37		尖頭器状素材	(49)	35	12	一部欠	20.3	チャート
38		尖頭器状素材	(65)	43	16		41.5	チャート
39		尖頭器状素材	(38)	38	14	一部欠	20.4	チャート
40		尖頭器状素材	(72)	52	18		69.4	チャート
41		尖頭器状素材	(60)	42	26		67.5	チャート

### 第3節 西又II遺跡出土の縄文時代草創期遺物

#### 第1項 土器(第12図)

昭和44年の調査では、有舌尖頭器などの石器群に伴って約7個体分、合計97点の隆起線文系土器が出土した。第12図にはそのうち主要なものの11点を図示した。

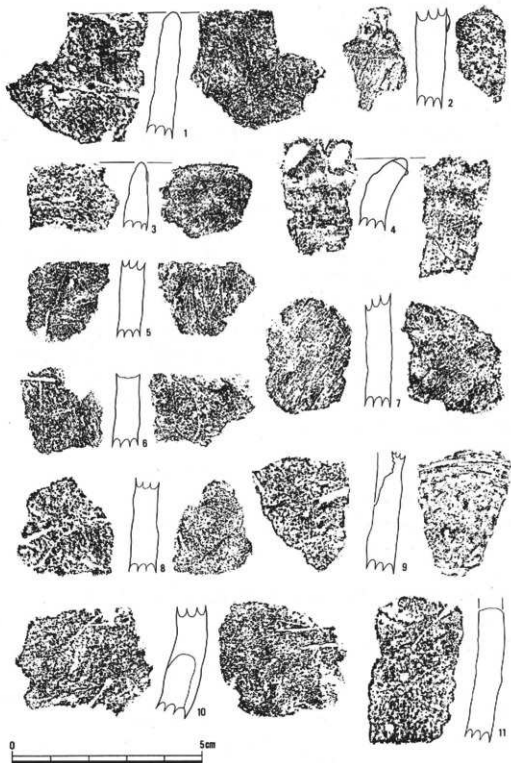
**素地** これらの土器の素地には直径約0.5～1mm程度の松葉状の細長い植物繊維、および直径0.5～3mm程度の乳白色砂粒、白色粒子が例外なく含まれている。その他に微細な雲母片を含むものも少量ある。

**成形・整形技術** 粘土帯により成形され、上下の粘土帯の接合は、上端が凸面、下端が凹面になるようである。器厚は4.5～6.5mmを測る。また、繊維束状の工具を用いて器面を整形したらしく、細かい擦痕が外面には横方向、内面には主に縦方向に残されているものが多い。その他、多くの破片の内面には指頭圧痕もみられ、凹凸が残されている。また器面に細長い繊維圧痕のみられるものが多い(8～11)。

**器形** 口縁部は、やや開き気味になるもの(1・3)と、くの字状に外側に屈曲するもの(4)がある。4の口唇部はへら状工具による斜方向の押圧により小波状を呈する。胴部の破片はやや開き気味になるものが多い。底部の破片は出土していないが円形丸底の深鉢形であろう。

**文様** 口唇部への施文には、へら状工具による押圧が斜め方向から約7mm間隔に加えられ、口縁部が小波状になるもの(4)や、上端に尖った工具で軽く刻み目を加えた例がみられる。胴部への施文には、幅2～3mm、厚さ1mm程度の細隆起線文を縦・横に貼付し、その上にへら状工具で交互に押捺を加え小波状としたもの(2)がある。4には、隆起線文の剝離した痕跡がみられる。そのほか無文の口縁部、胴部破片(1・3・5～11)があるが、これらもすべて細隆起線文土器に伴うものと考えられる。

**出土土器の属年的位置について** 西又II遺跡出土の土器は、素地に細長い植物繊維を混入し、器面に細長い繊維圧痕を残すなどの点で小馬背遺跡と共通の特徴を示している。これは柳又遺跡B地点でも指摘されており、開田高原における細隆起線文土器の特徴の1つとみなされる。隆起線文系土器は九州から青森県にかけて広く分布し出土例が増加しているが、素地に植物繊維を混入し圧痕を残す同様の例は、愛媛県上黒岩岩陰遺跡(江坂他、1967)など中部、西日本の細隆起線文土器にみられる。これらの遺跡では柳又型の有舌尖頭器も共伴しており、同一の文化圏を形成していたことも考えられる。また、広島県馬渡岩陰遺跡(松崎、1976)から出土した平底無文土器にも素地に植物繊維が含まれており、関連性が注目される。また第12図4にみられる細隆起線文の文様構成は、愛媛県上黒岩岩陰遺跡、東京都多摩ニュータウンNo.426遺跡(原川、1979)などに類例がみられる。西又II遺跡出土の土器にもそれらと併行する属年の位置があたえられよう。



第12図 西又II遺跡出土の土器

## 第2項 石器

昭和44年度の調査で出土した遺物のうち、主要な石器を写真図版に掲載した。その内訳は有舌尖頭器18、槍先形尖頭器27、尖頭器状素材12、片刃打製石斧3であり、他に剥片が55点ある。剥片を除く個々の計測値を第2表にまとめた。また有舌尖頭器と槍先形尖頭器については、形態と大きさによって分類し、小馬背遺跡との比較の便宜として長幅の比率および重量をグラフにして示した(第13・14図)。なお剥片を除いた石質別の内訳は、チャート44、玻璃質安山岩13、安山岩1、凝灰岩1、不明1である(以下、遺物番号は図版18~27の通し番号を示す)。

### 1. 有舌尖頭器 (1~11)

完形品についてみると、まず幅と長さの比率に基づいて2形態に大きく分類することができる。各形態は大きさによってさらに4つのグループに細分される。

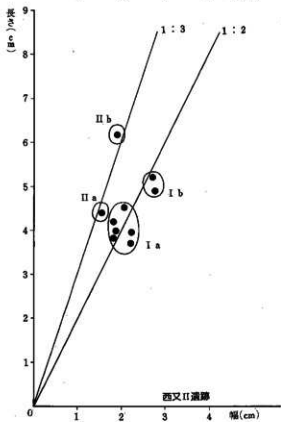
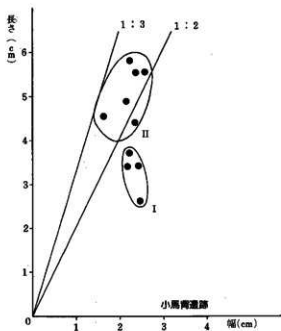
I類(1・3・4・5) 幅と長さの比率がおよそ1:2で、基部の幅が広く側縁部が外側に湾曲したずんぐりとした形態の一群である。本類は大きさによってさらに2種類に細分される。小形のa(1・3・5)は、長さ重量の平均がそれぞれ37mm、4.5gである。これに対して大形のb(4)は、長さ50mm、重さ8.2gである。石質別の内訳をみるとチャート3、玻璃質安山岩5となっている。剥離の順序を観察すると、一方の側縁部を基部から先端へ他方の側縁部を先端から基部へ連続的に押圧剥離を施すことによって刃部を加工したことがわかる。3・4・5には、いわゆる斜状平行剥離が顕著にみられる。1点を除き舌部とかえしの加工は、側縁部への加工がなされた後に施されている。3は逆に舌部とかえしの作り出しが行われた後に側縁部が加工されている。

II類(2・6) 幅と長さの比率がおよそ1:3で、細身の形態を呈し、刃部は直線的である。本類も大きさによって2種類に細分することができる。これには長さ38mm、重量3.0gの小形のa(2)と、長さ57mm、重量5.4gを測る大形のb(6)が該当する。石質はいずれも玻璃質安山岩である。刃部と舌部に対する剥離の順序はI類と同様であり、いわゆる斜状平行剥離が特徴的にみられる。

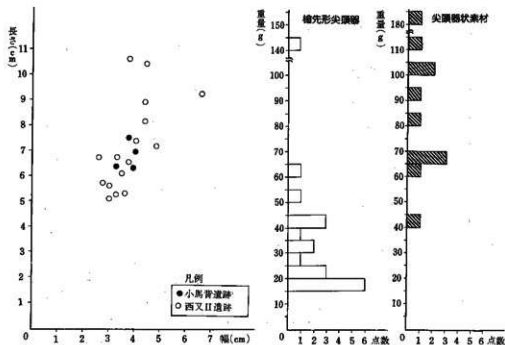
有舌尖頭器には、一方の側縁部を基部から先端へ他方の側縁部を先端から基部へ連続的に押圧剥離を施すことによって刃部を加工し、最後に舌部を作り出すという剥離順序が特徴的に観察された。なお、舌部とかえしの加工がなく未製品と思われる例が2点ある。

### 2. 槍先形尖頭器 (12~21・24・25・29・31)

木葉形の形態を呈し、両面調整が施されている。幅と長さの比率がおよそ1:2である。12・13・14・15は完成品で、長さ重量の平均がそれぞれ60mm、17.3gである。一方、17を除くその他は先端・側縁部への調整が粗く、左右非対称な外形を呈し明らかな未製品である。長さは51mm~90mm、重量は15.0g~46.0gの間に収まる。幅1に対する長さの比率は、0.35~2.90であ



第13図 小馬背・西又II遺跡出土の有舌尖頭器とその比較



第14図 小馬背・西又II遺跡出土の槍先形尖頭器とその重量

る。石質別の内訳は、チャート23、玻璃質安山岩3である。17は先端部と基部を欠損するが、幅が非常に狭く柳葉形を呈すると思われる。安山岩製であり側縁部に押圧剝離が施されることにより、刃部の加工がなされている。他の有舌尖頭器や槍先形尖頭器とは異なる時期のものであろう。

### 3. 尖頭器状素材 (22・23・26～28・30)

素材となる剥片・礫核から数枚程度の剥片が剝離されただけで、先端・側縁部の作り出しがみられず、石核状を呈する段階のものである。長さは44mm～84mm、重量は22.2g～188.0gの範囲にそれぞれ取まる。石質はいずれもチャートであり、節理が顕著に観察されるものが多い。製作途上の未製品であると思われる。

### 4. 片刃打製石斧 (32～34)

32～34の3点が出土している。長さはそれぞれ124mm、142mm、118mmで、重量はそれぞれ100.0g、167.9g、107.9gである。断面形は三角形状を呈し、最大厚はそれぞれ23mm、26mm、20mmを測る。片刃であり、刃部は直刃をなす。刃部を研磨した局部磨製の石斧は含まれない。32と34は風化のために、剝離面をはっきりと観察できない。側縁部から剝離が施されて、外形が整えられている。石質は32が玻璃質安山岩、34が凝灰岩である。33は表面に礫面を残す。表表面とも側縁部から剝離が施され、刃部は裏面から細かい剝離がなされている。石質は不明である。



## 第4節 石器に関する考察

### 第1項 小馬背・西又II遺跡出土の有舌尖頭器の比較

小馬背・西又II両遺跡から出土した有舌尖頭器の形態を比較するため、便宜的に長幅を計測してグラフに示した(第13図)。小馬背遺跡の10点は、いずれも昭和43年の調査で出土したものであり、一方、西又II遺跡の12点には、昭和44年調査の出土品(9点)とその後地主奥原彰氏により採集されたもの(3点)が含まれている。このように長幅の比率と大きさから形態分類を試みて、小馬背遺跡の有舌尖頭器はI類・II類に、西又II遺跡の有舌尖頭器はIa類・Ib類・IIa類・IIb類に分類することができる。そのうち小馬背I類は西又Ia類と対応し、小馬背II類は西又IIa類と対応する。

小馬背I類・西又Ia類は幅が広くずんぐりとし、側縁が外湾した一群である。幅1に対する長さの比率はそれぞれ1.44・1.83であり、また幅1に対する舌の長さの比率は0.21・0.30である。小馬背遺跡のものに比べると、西又II遺跡の有舌尖頭器の方が、幅に対する長さ、舌の長さがともに長い。

一方小馬背II類・西又IIa類は細長く側縁が直線的な一群である。幅1に対する長さの比率はそれぞれ2.38・2.86であり、また幅1に対する舌の長さの比率は0.30・0.37で、この場合も小馬背遺跡の有舌尖頭器より西又II遺跡のものの方が幅に対する長さ、舌の長さが長い。このように小馬背・西又II遺跡の有舌尖頭器は、幅広のずんぐりした一群と細身の一群を共に含む点で共通するものの、幅に対する長さ、舌部の長さに差異がみられる。

なお西又Ib類と西又IIb類は、小馬背遺跡の有舌尖頭器の中に該当するものが含まれない。

これらの分類を小林達雄による柳又遺跡B地点の有舌尖頭器の4つの分類(小林、1967)と対比してみると、柳又I型A類には西又IIb類、柳又I型B類には西又IIa類、柳又II型には小馬背II類、柳又III型には小馬背I類と西又Ia類がそれぞれ対応すると考えられる。また小林の分類には西又Ib類に対応するものは含まれない。

石質については小馬背・西又II遺跡ともにチャートと玻璃質安山岩を用いており、両遺跡の間に大きな差異はみられない。

### 第2項 尖頭器状素材について

小馬背・西又II遺跡では、有舌尖頭器や槍先形尖頭器に伴い、先端や刃部の作り出しがなく、素材となる剥片や礫核から剥片を数枚剝離した石核状の石器が多数出土した。この種の石器については、これまで「柳又第2ポイント」「両面調整石器」などと呼ばれてきており、槍先形尖頭器の未製品と考えられている。これをこの報告では仮に「尖頭器状素材」と呼んだ。

重量の点で槍先形尖頭器と比較すると、第14図のようになる。平均重量は、槍先形尖頭器が44.1gであるのに対し、尖頭器状素材は90.3gと2倍近く重い。重量や大きさの点では、66mm

×39mm・36g程度の槍先形尖頭器の素材としては十分な大きさをもっており、この石器をいわば核にして剥離を加え、最終的には槍先形尖頭器を製作したと考えられる。また、石質も全てチャートであり、こうした石材の点からも、槍先形尖頭器の未製品と考えられる。

### 第3項 有舌尖頭器の剥離技術について

小馬背・西又II遺跡出土の有舌尖頭器に共通してみられる大きな特徴は、斜状平行剥離と呼ばれる独特の製作技術にある。これは、直前の剥離面に半分重複しながら順を追って一方向的に押圧剥離を施していくため、結果として細長い槌状の剥離が斜めまたは平行に連なっているものである。その剥離の順序の観察から製作技術を復元してみると次のようになる。

- ① まず一側縁の刃部を先端からかえし方向へ、次にもう一方の刃部をかえしから先端へ向かって剥離を行う。その際、順を追って一方向的な押圧剥離を施すため、表面には規則的な斜状の稜線がのこされる。
- ② 表面の側縁部に対して、同じ順序の剥離を施す。
- ③ 先端および側縁の刃部を加工し、その後舌部およびかえしを作り出す。

斜状平行剥離を施した有舌尖頭器の類例は、長野県西南部から岐阜・愛知県、近畿地方を中心に広く分布している。いわゆる櫛又ポイントは、この剥離技術を基盤に成立したものである。

第2表 西又II遺跡出土石器計測値一覧

No.	図版番号	器種	長さ(測長)(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	部位	位置	重量(g)	石材
1	図版18-1	有舌尖頭器	34	18	7	先端・基部欠		3.4	玻璃質安山岩
2	図版18-2	有舌尖頭器	38	16	5	基部欠		3.0	玻璃質安山岩
3	図版18-3	有舌尖頭器	40	21	5	完形		4.4	チャート
4	図版18-4	有舌尖頭器	49	28	7	完形		8.9	玻璃質安山岩
5	図版18-5	有舌尖頭器	38	20	6	先端・基部欠		5.9	玻璃質安山岩
6	図版18-6	有舌尖頭器	57	16	8	完形		5.4	玻璃質安山岩
7	図版18-7	有舌尖頭器	82	27	9	完形		16.9	チャート
8	図版19-8	有舌尖頭器	55	17	6	基部欠		4.6	チャート
9	図版19-9	有舌尖頭器	40	24	7	基部欠		5.5	チャート
10	図版19-10	有舌尖頭器	41	22	6	先端部欠		5.5	玻璃質安山岩
11	図版19-11	有舌尖頭器	47	24	6	先端部欠		7.5	玻璃質安山岩
12	図版19-12	槍先形尖頭器	67	26	7	完形		15.4	チャート
13	図版19-13	槍先形尖頭器	57	28	11	完形		15.3	チャート
14	図版20-14	槍先形尖頭器	65	38	12	完形		37.2	チャート
15	図版20-17	槍	85	22	10	先端・基部欠		21.3	安山岩
16	図版20-15	槍先形尖頭器	56	30	12	完形		15.5	チャート
17	図版20-16	槍先形尖頭器	52	31	11	完形		16.2	玻璃質安山岩
18	図版20-18	槍先形尖頭器	67	33	12	完形		20.6	玻璃質安山岩
19	図版21-19	槍先形尖頭器	81	44	13	完形		44.3	チャート

No	図版番号	器 種	長(現長)(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	部 位	重量(g)	石 材
20	図版21-20	槍先形尖頭器	104	45	10	一 部 欠	49.5	チ ャ ー ト
21	図版22-21	槍先形尖頭器	89	44	16	完 形	60.1	チ ャ ー ト
22	図版23-22	尖頭器状素材	84	47	19		60.4	チ ャ ー ト
23	図版23-23	尖頭器状素材	62	54	35		99.9	チ ャ ー ト
24	図版23-24	槍先形尖頭器	120	61	31	一 部 欠	137.5	チ ャ ー ト
25	図版24-25	槍先形尖頭器	97	66	21	完 形	149.2	チ ャ ー ト
26	図版24-26	尖頭器状素材	75	56	31		103.4	チ ャ ー ト
27	図版25-27	尖頭器状素材	79	69	34		188.0	チ ャ ー ト
28	図版25-28	尖頭器状素材	74	50	37		91.9	チ ャ ー ト
29	図版26-29	槍先形尖頭器	68	40	19	基 部 欠	52.2	チ ャ ー ト
30	図版26-30	尖頭器状素材	60	37	25		65.4	チ ャ ー ト
31	図版26-31	槍先形尖頭器	60	37	14	一 部 欠	25.5	チ ャ ー ト
32	図版27-32	片刃打製石斧	124	34	23	完 形	100.0	玻璃質安山岩
33	図版27-34	片刃打製石斧	142	37	26	完 形	167.9	不 明
34	図版27-33	片刃打製石斧	118	39	20	完 形	107.9	凝 灰 岩
35		有舌尖頭器	22	21	6	先端部欠	3.0	チ ャ ー ト
36		有舌尖頭器	26	22	6	先端部欠	3.3	玻璃質安山岩
37		有舌尖頭器	38	33	10	先端部欠	10.1	チ ャ ー ト
38		有舌尖頭器	40	20	6	基部欠	5.0	チ ャ ー ト
39		有舌尖頭器	28	16	6	基部欠	2.4	玻璃質安山岩
40		有舌尖頭器	37	21	6	完 形	4.3	チ ャ ー ト
41		有舌尖頭器	27	18	4	基部欠	2.8	チ ャ ー ト
42		槍先形尖頭器	71	47	19	先端部欠	62.8	チ ャ ー ト
43		槍先形尖頭器	61	35	10	完 形	23.2	チ ャ ー ト
44		槍先形尖頭器	34	45	8	先端・基部欠	17.4	チ ャ ー ト
45		槍先形尖頭器	53	36	10	完 形	18.4	チ ャ ー ト
46		槍先形尖頭器	42	17	7	基部欠	4.4	チ ャ ー ト
47		槍先形尖頭器	107	37	21	完 形	82.6	チ ャ ー ト
48		槍先形尖頭器	20	18	6	基部欠	2.4	チ ャ ー ト
49		槍先形尖頭器	18	31	11	先端部欠	6.7	チ ャ ー ト
50		槍先形尖頭器	51	30	10	完 形	13.1	玻璃質安山岩
51		槍先形尖頭器	48	37	9	先端部欠	17.7	チ ャ ー ト
52		槍先形尖頭器	55	26	16	一 部 欠	22.2	チ ャ ー ト
53		槍先形尖頭器	26	57	17	先端部欠	22.8	チ ャ ー ト
54		槍先形尖頭器	74	40	13	完 形	40.5	チ ャ ー ト
55		尖頭器状素材	58	38	25		51.4	チ ャ ー ト
56		尖頭器状素材	44	37	21		36.5	チ ャ ー ト
57		尖頭器状素材	67	33	10		22.2	チ ャ ー ト
58		尖頭器状素材	70	52	32		114.6	チ ャ ー ト
59		尖頭器状素材	70	55	20		180.0	チ ャ ー ト
60		尖頭器状素材	67	42	21		49.6	チ ャ ー ト

## 第VI章 調査成果と問題点

考古学実習では、2年間にわたり開田高原小馬背遺跡ならびに関連の深い西又II遺跡の調査を行ったが、遺跡の現状から両遺跡の調査は、今回をもって一応の区切りがつけられることになった。そこで、これまでの調査成果と若干の問題点を挙げてまとめにかえたい。

第1の成果としては、代表的な遺跡でありながら実態のはっきりしなかった両遺跡について、遺跡の範囲確認や包含層の遺存状態などの基礎的調査を行い、現状を確認できたことが挙げられる。それらの基礎的な成果は、今後開田高原の遺跡調査を進める上での一つの指針となろう。また、これまで未報告であった両遺跡の出土資料の紹介を通じて、両遺跡における縄文時代草創期の石器群・土器の内容をある程度明確にできたことも成果の一つと言える。特に柳又ポイントと呼ばれる有舌尖頭器については、形態的特徴や製作技術を詳しく観察することができ、それらに伴う槍先形尖頭器の内容もおおむね明らかにすることができた。これらの成果によって、開田高原における縄文時代草創期の様相解明という所期の目的は、一応果たすことができたとと思われる。

しかし、それと同時に潰滅しつつある遺跡の現状も明らかとなった。開田高原は昭和54年10月の御岳山噴火の際にも多量の降灰があり、畑作に深刻な影響が出たばかりである。そして、その都度土地改良工事がすすめられてきている。小馬背・西又両遺跡も例外ではなく、こうした不可避的な自然災害に対処する意味からも、分布調査・試掘調査などの基礎的調査を組織的に行い、開田高原全体の遺跡分布を把握する作業を行っていく必要がある。

本年度の調査はあまり天候にめぐまれず、作業の遅れなど考古学実習生の我々にとって苦勞の多い調査であったが、なんとか報告書を刊行することができた。発掘調査の準備にはじまり、9月の調査を経て遺物の整理、報告書の編集・入稿までの1年間、考古学実習は充実したものであったが、幾つかの反省点もある。特に調査後の整理作業では、慣れない遺物の実測やレイアウト作業などを行ったが、まさに試行錯誤を繰り返す日々の連続であった。そして作業が大幅に遅れてしまった。共同作業の難しさや計画性の大切さを痛感した次第である。しかし、各々が実習生として、何事に対しても真剣な態度で取り組み、一冊の報告書を作り上げたことは、生涯忘れることのできない貴重な体験であった。

最後に、調査に御協力いただいた非常に多くの方々に感謝の意を表し、おわりにかえさせていただきます。

## 引用参考文献

- 安達厚三 1972 「先土器時代」『岐阜県史』通史編（原始）
- 伊深 智 1971 「西又II遺跡調査ノートより」 木曾教育第36号
- 伊深 智 1974 「西又II遺跡調査ノートより」 木曾教育第44号
- 江坂輝弥・岡本健児・西田 栄 1962 「愛媛県上浮穴郡美川村上黒岩岩陰遺跡」『日本考古学協会第28回総会研究発表要旨』
- 神村 透 1970 「開田高原での発掘調査から一有舌尖頭器をもとめて一」 考古学研究第16巻第3号
- 小林達雄 1961 「有舌尖頭器」 歴史教育第9巻第3号
- 小林達雄 1962 「無土器文化から縄文文化の確立まで」『國學院大學創立80周年記念若木祭展示目録』 國學院大學考古学会
- 小林達雄 1967 「長野県西筑摩郡開田村柳又遺跡の有舌尖頭器とその範型」 信濃第19巻第4号
- 小林達雄編 1988 「小馬背遺跡」 國學院大學文学部考古学研究室
- 澄田正一・大参義一 1956 「九合洞窟遺跡」 名古屋大学文学部
- 芹沢長介 1966 「新潟県中林遺跡における有舌尖頭器の研究」 東北大学日本文化研究所研究報告2
- 原川雄二・鈴木俊成 1981 「多摩ニュータウンNo.426遺跡」『多摩ニュータウン遺跡—昭和55年度（第3分冊）』財東京都埋蔵文化財センター
- 樋口昇一・森嶋 稔 1959 「木曾開田高原の無土器文化遺跡—柳又遺跡を中心として」 信濃第11巻第11号
- 樋口昇一・森嶋 稔 1960 「長野県柳又遺跡第1次調査概要」『日本考古学協会第26回総会研究発表要旨』
- 樋口昇一・森嶋 稔・小林達雄 1965 「木曾開田高原における縄文以前の文化」 信濃第19巻第4号
- 藤沢宗平 1956 「古屋敷遺跡」 信州ローム1
- 藤森栄一 1933 「山國夏信」 考古学第4巻第6号
- 紅村 弘 1963 「東海の先史遺跡—綜括編」 名古屋鉄道株式会社
- 松崎寿和編 1976 「帝釈峡遺跡群」 西紀書房
- 松村 康 1911 「四千尺の高原にて石鏃を採集す」 人類学雑誌第27巻第6号
- 森嶋 稔 1960 「木曾開田村柳又A地点の石器」 信濃教育第881号
- 長野県史刊行会編 1983 「長野県史」考古資料編3（中信地方） 長野県史刊行会

## 発掘関係者一覧

**発掘参加者(実習生)** 赤塚仁、足立孝男、宇田敦司、神山尚美、小暮伸之、下平博行、中村大、山本陽子

**発掘特別参加者** 赤塚弘美、安西宏、市野康子、伊藤慎二、今村英次、岩本みゆき、大坪聖子、岡崎友子、小川岳人、小倉和重、小澤いづみ、川端清倫、國府田たま子、小林勝己、小松学、小峰孝男、佐藤芳之、澤柳秀実、杉山真理、高橋真実、竹内美能里、谷口雅美、千葉剛成、土居奈緒美、富田淳子、中川佳三、中村拓也、賛田明、西山久美子、野村敦、初野陽子、松本尚子、山内利秋、石村具美、宮尾享、三浦英俊、福本由紀、助川剛栄(以上國學院大學学生)、今福利恵、白井万記、柏谷崇、本多達哉(以上國學院大學大学院生) 若野和郎、中谷典久(以上青山学院大学学生) 桜井均(上智大学大学院生) 福田裕二(駒沢大学学生) 野沢英行(東京大学学生) 橋本康司(國學院大學卒業生)

**発掘協力者ならびに機関** 長野県教育委員会、開田村教育委員会、長野県埋蔵文化財センター、学校法人市部学園、開田村郷土館、青樹健一(小馬骨遺跡地主)、奥原彰(西又遺跡地主)、村上和幸(柳又遺跡地主)、神村透(王滝中学校)、山下生六(上松町教育長)、樋口昇一、丸山敏一郎(以上長野県埋蔵文化財センター)、森嶋稔(日本考古学協会会員)、神田正知(開田村長)、青樹操(開田前村長)、千村博男(開田村教育委員会教育長)、末岡照章(学校法人市部学園理事長) 古畑正美(学校法人市部学園開田高原研修センター)、太田喜幸(長野県教育委員会文化課)、吉田隆幸、松田武重(以上開田村教育委員会)、たけみ商店 舘見旅館、やまか商店

**見学者** 浅野光洋(國學院大學久我山中学・高等学校)、安孫子昭二・川崎義雄・早川泉(以上東京都教育庁文化課)、新井真博・館野学・原川雄二・田中純男(以上東京都埋蔵文化財センター)、石岡憲雄(長瀬自然史博物館)、稲野裕介(北上市教育委員会)、岩崎泰一・齋藤利昭・関根慎二(以上群馬県埋蔵文化財事業団)、植木弘・植木智子(以上嵐山町教育委員会)、宇田川肇・山村貴輝(四葉遺跡調査会)、遠藤かほる・遠藤佐(以上國學院大學卒業生)、大竹憲昭・大竹幸恵(以上長野県埋蔵文化財センター)、加藤秀之(國學院大學大学院生) 神村透(王滝中学校)、川口潤(埼玉県埋蔵文化財調査事業団)、河内公夫(都立府中病院内遺跡調査会)、栗原文蔵(埼玉県立歴史資料館)、小菅将夫(明治大学大学院生)、小林信一(千葉県文化財センター)、酒井重洋(富山県埋蔵文化財センター)、佐藤雅一(自営業)、島田哲男(大田市教育委員会)、新谷和孝(松本市教育委員会)、杉江敬(館山市立博物館)、須藤隆司(佐久市埋蔵文化財センター)、竹内俊之(東京都外郭環状道路練馬地区遺跡調査会)、竹之内敏幸(会社員) 友野良一(日本考古学協会会員)、福田依子(千葉県文化財センター)、橋本正(富山県教育委員会)、星野洋治(新潟県長岡市)、前村行武(会社員)、松尾美貴(國學院大學考古学研究室)、宮沢賢臣(南八王子地区遺跡調査会)、武藤康弘(東京大学)、村井実(株式会社京都科学)、山崎和巳(多摩市教育委員会)、山田真一(豊科町教育委員会)、山本哲也(君津都市文化財センター) 大崎紀子・能勢幸枝(以上國學院大學学生)

**整理参加者** 赤塚弘美、安西宏、市野康子、伊藤慎二、今村英次、岩本みゆき、大坪聖子、岡崎友子、小川岳人、小倉和重、小澤いづみ、川端清倫、國府田たま子、小林勝己、小松学、小峰孝男、佐藤芳之、澤柳秀実、杉山真理、高橋真実、竹内美能里、谷口雅美、千葉剛成、土居奈緒美、富田淳子、中川佳三、中村拓也、賛田明、西山久美子、野村敦、初野陽子、松本尚子、山内利秋

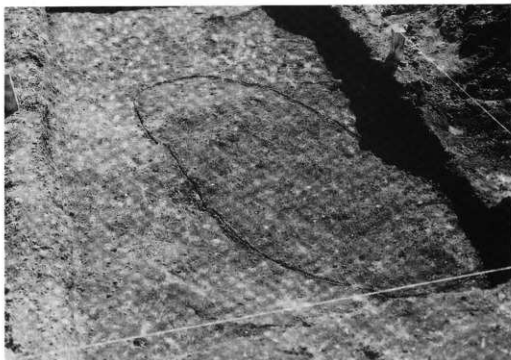


小馬背遺跡現状



小馬背遺跡現状

図版2



土坑確認状況



土坑完掘状況



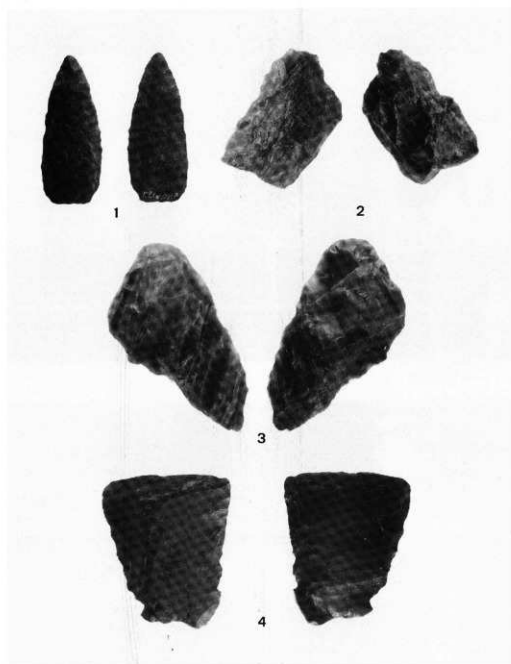


グリットの設定風景

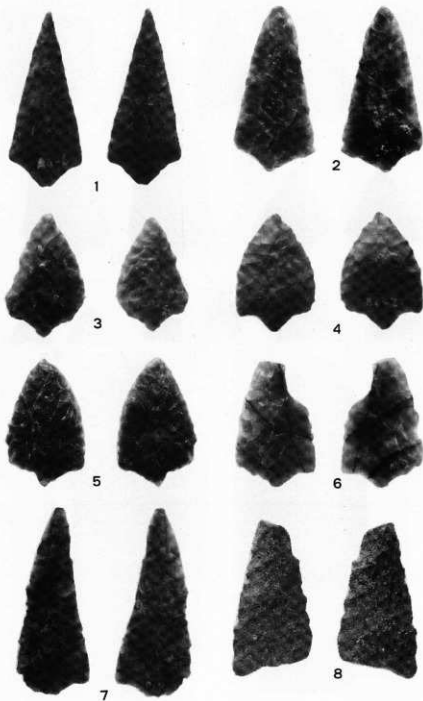


発掘調査風景

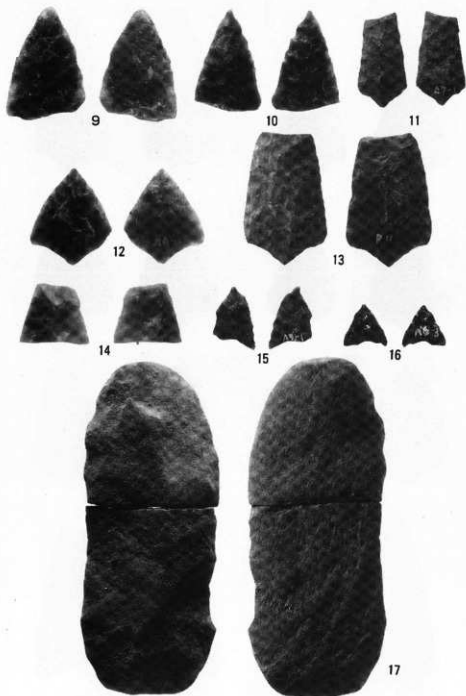
図版4

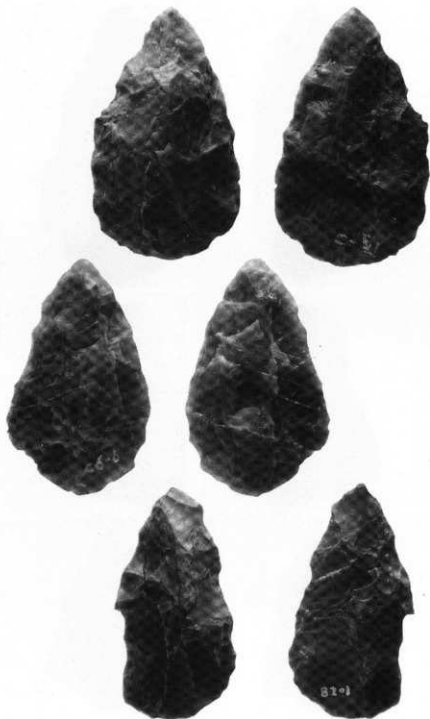


小馬背遺跡調査区出土の石器

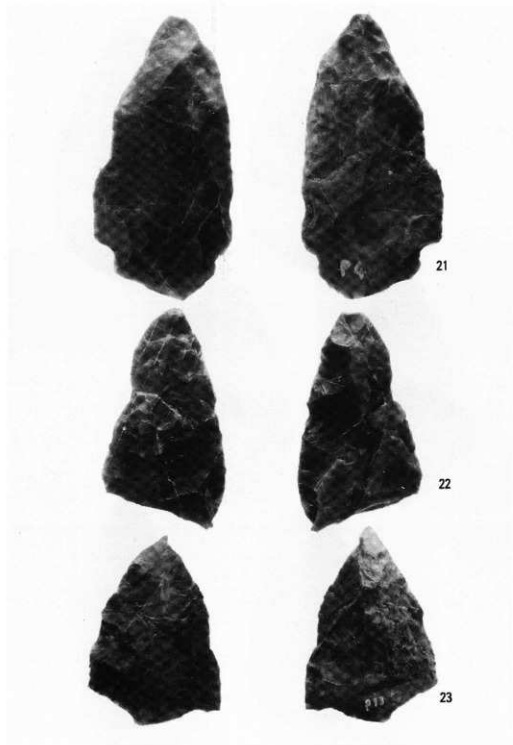


小馬背遺跡出土の石器(1) 昭和43年調査





小馬背遺跡出土の石器(3) 昭和43年調査



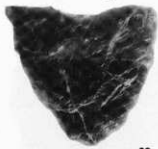
小馬背遺跡出土の石器(4) 昭和43年調査



24



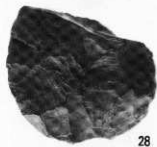
25



26



27



28



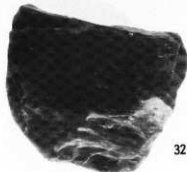
29



30



31



32





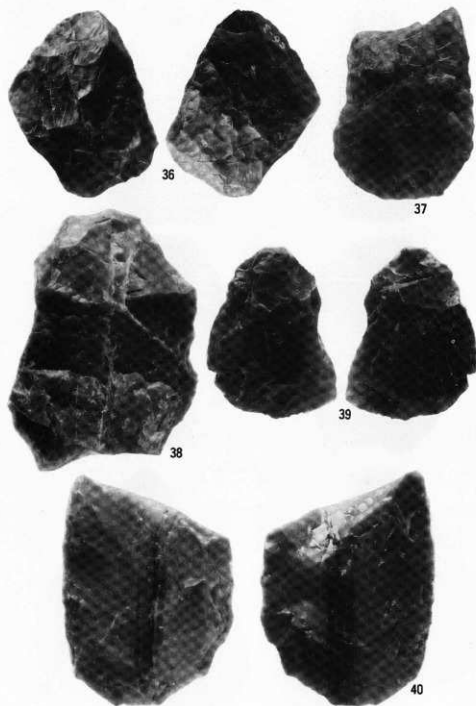
33



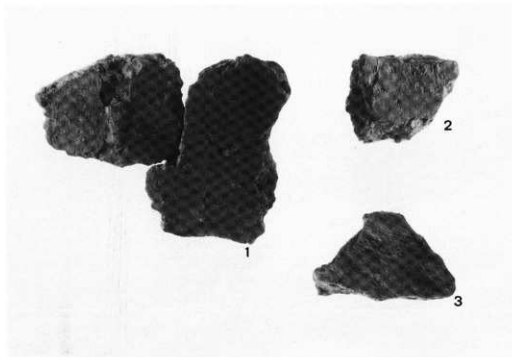
34



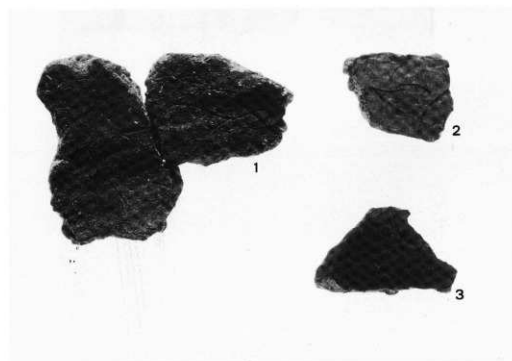
35



小馬背遺跡出土の石器(8) 昭和43年調査



小馬背遺跡出土の細隆起線文土器



同 裏面

図版14



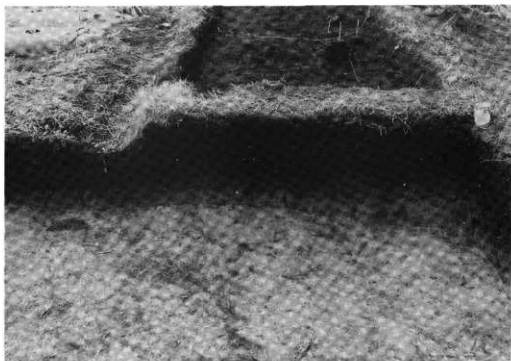
西又II遺跡現状（東から）



西又II遺跡現状（南から）



西又II遺跡試掘狀況



西又II遺跡土層堆積狀況（左側畑地）

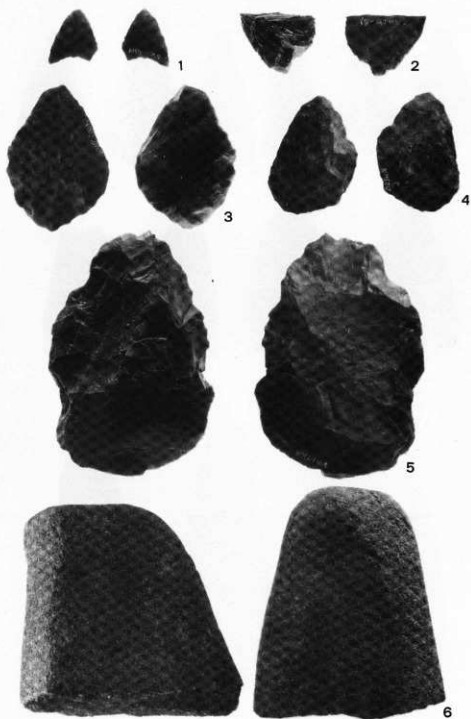
図版16



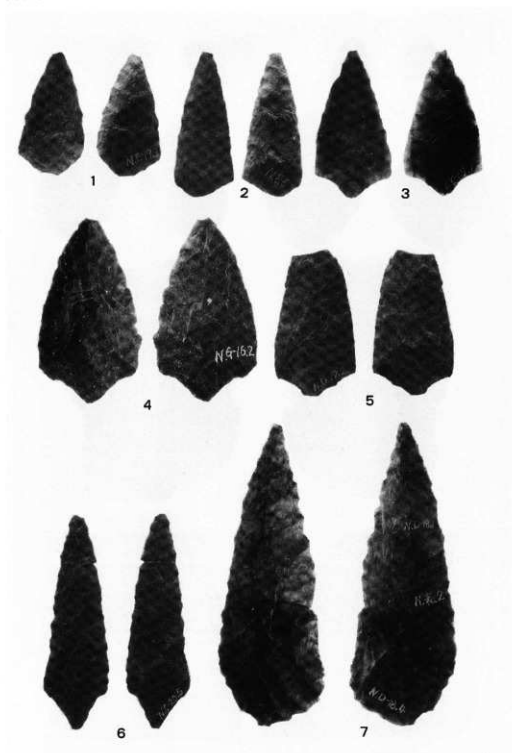
西又II遺跡調査風景



西又II遺跡調査風景

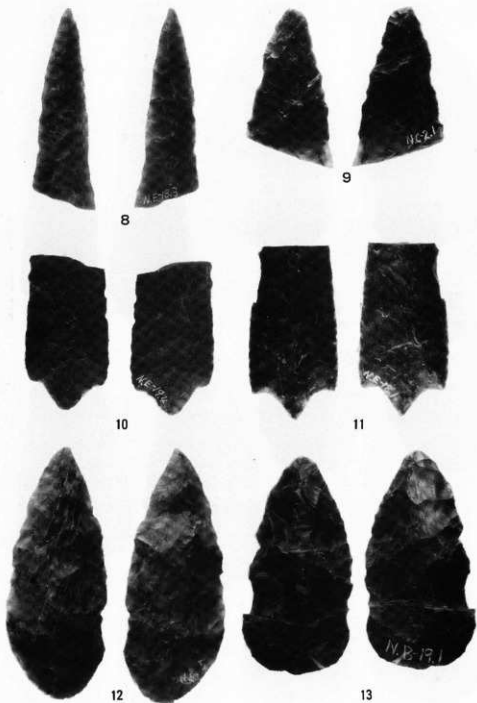


西又II遺跡採集の石器

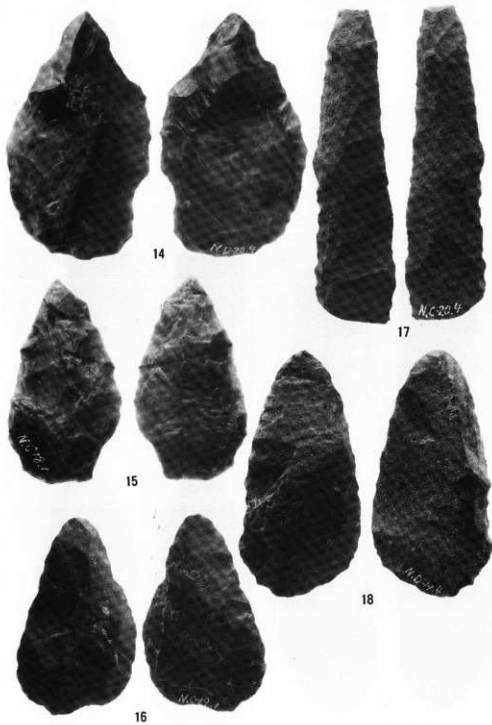


西又II遺跡出土の石器(1) 昭和44年調査





西又II遺跡出土の石器(2) 昭和44年調査



西又II遺跡出土の石器(3) 昭和44年調査



19



20





21



22





23



24





25



26



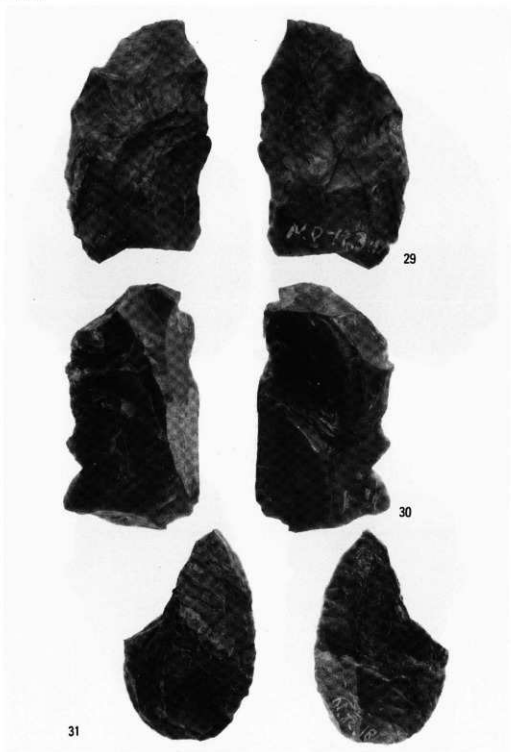


27



28





西又II遺跡出土の石器(9) 昭和44年調査





32



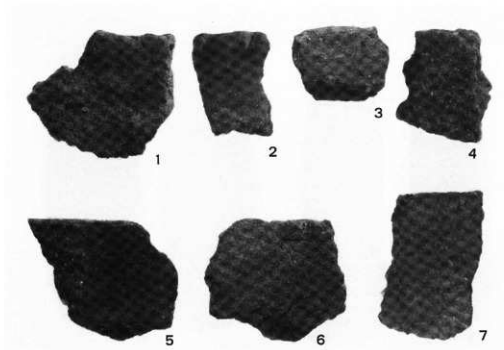
33



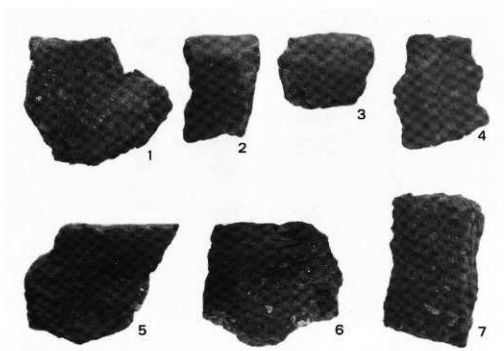
34



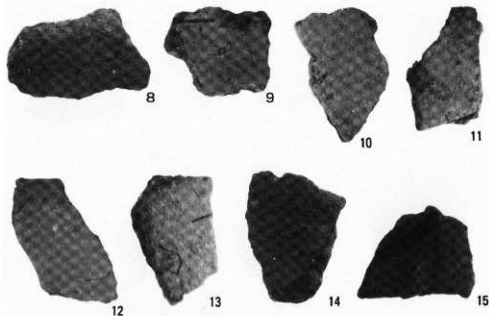
図版28



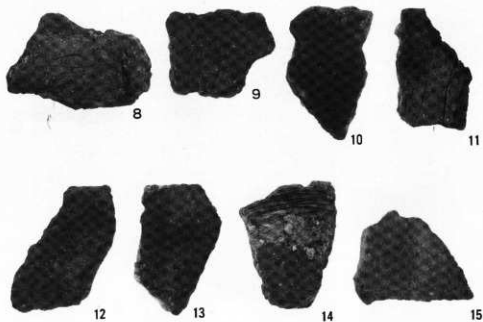
西又II遺跡出土の隆起線文土器(1) 昭和44年調査



同 裏面

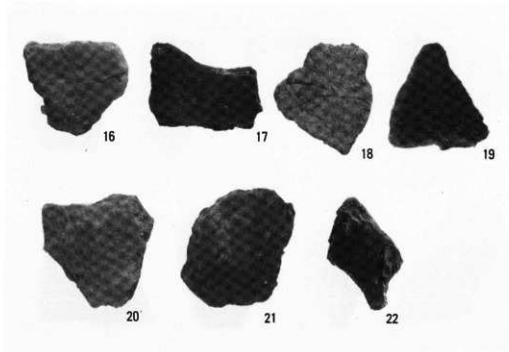


西又II遺跡出土の隆起線文土器(2) 昭和44年調査

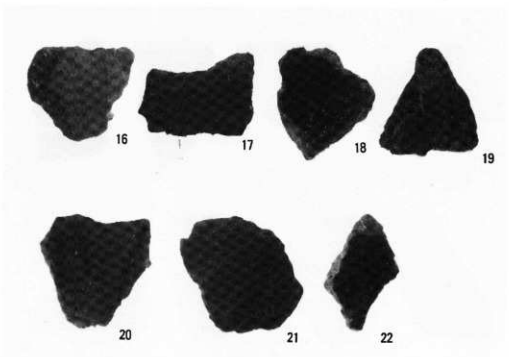


同 裏面

図版30



西又II遺跡出土の隆起線文土器(3)



同 裏面

---

國學院大學文学部考古学実習報告 第17集

小馬背遺跡1989

1989年3月31日 発行

編集 小林達雄

発行所 國學院大學文学部  
考古学研究室

〒150 東京都渋谷区東4-10-28

電話 03(409)0111

印刷所 株式会社エイコープリント

---